

# 植物研究雑誌 第八卷 第九、十號

(通卷第七十九、八十號) 昭和八年(1933)四月三十日  
東京 津村研究所出版部 發行

主筆 牧野富太郎

## ○『増訂草木圖說』卷末ノ言

牧野富太郎

私ハ飯沼慾齋先生著ハス所ノ『草木圖說』(今カラ七十七年前)ヲ增訂シ東京ノ書肆成美堂デ明治四十年十月ニ其第一輯ヲ、同四十三年八月ニ其第二輯ヲ、大正二年一月ニ其第三輯並ニ第四輯ヲ出版シタ、之レガ『増訂草木圖說』(洋装四冊)デ畢竟本書『新訂』本(田中芳男、小野職慾爾氏ノ校)ノ第二版ニ次デノ第三版デアル、右私ノ校訂中ニ私ノ感ジタ事項ヲ叙述シタモノガ即チ『卷末ノ言』デアツテ其レガ第四輯ノ卷尾ニ附載シテアルノデアル、今本書ヲ繙カザル人ノ爲メニ舊イ事デハアルガ溫古知新ノ主旨デ故ラニ茲ニ其レヲ擧ゲル

## 卷末ノ言

牧野富太郎

○我日本ニ於テ植物ノ邦語科名トシテ從來ノ如ク漢名ヲ基トセルモノ、必要ナル時期ハ疾々既ニ過ギ去レリ然レドモ世人尙其推移セル趨勢ニ察セズ敢テ慎重ナル考慮ヲ其間ニ致サズ依然トシテ舊套ヲ墨守シ以テ前日ノ態ヲ今時ニ踏襲シテ恬然タルハ東方日出デテ尙燈ヲ然シツ、アルヲ證スルモノニシテ敢テ首肯スペキ理由ノ其間ニ存スルアルニアラザルナリ予ハ科名ニ採リシ植物ハ宜シク邦語ヲ以テ之ヲ書スペキノ極メテ今日ニ適スルヲ想ヒ滔々タル世ノ舊潮ニ抗シ今ヨリ二十餘年前以降其植物ハ假名ヲ以テ之ヲ著ハシ唯其科ノ一字ノミ從來ノ如

『增訂草木圖說』卷末ノ言



慈濟飯沼長順先生肖像

此像がらす寫シノモノノ飯沼家ニ傳ハル予先年始テ之ヲ紙ニヤカシメシニ此印像ヲ得タ、右傍ノ詩葉間庭延國老ノ文字ハ小野蘭山ノ筆蹟デアル(牧野)

從來ノ如ク漢名ヲ用キテ科名ヲ表スルニ當テハ不便迂遠ノ點殊ニ多ク徹頭徹尾之ヲ排斥スペ  
理由固ヨリ一二

ク漢字ヲ存シ而シ  
テ獨ダ脣形、繖形、  
十字等ノ如キ形容  
語ヲ以テ成リタル  
科名ノミ舊ニ依テ  
全然漢字ヲ用キタ  
リ此ノ如キ形容語  
ト云ヒ科ノ字ト云  
ヒ尙故ノ如ク漢字  
ヲ用キタル所以ハ  
現時尙我邦ハ漢字  
假名混用ノ時代ナ  
ルヲ以テ此ノ如ク  
スルモ亦敢テ不便  
ヲ其間ニ感ゼズ却  
テ今日ノ時宜ニ適  
シタル方法ナリト  
信ズレバナリ其他

ニシテ止マラズ予ハ今一々此ニ之ヲ詳述スルノ勞ヲ執ラズト雖ドモ學者及ビ教育者少シク沈思シ熟考スレバ則チ自ラ發明スル所蓋シ必ズ多カラン乃チ之ヲ學術上並ニ教育上ニ施シテ其効果ノ果シテ顯著ナルヲ見ンノミ世人ハ守株膠柱ノ弊ヲ知ルニアラズヤ、而シテ書中括弧内ニ舊態ノ科名ヲ併記セシハ是レ單ダ新舊對照ノ便ヲ圖リシニ過ギザルノミ敢テ他意アルニアラザルナリ

○我邦本草時代ニ在テハ漢名ノ必要ナリシコト恰モ現時ノ學名即チ「ラテン」名ノ如キナリシナリ其必用時代ヲ過ギシ今日ニ在テ尙之ヲ尊重存置スル所以ヲ知ラザルナリ加之從來我邦所用ノ漢名タル孟浪杜撰ノモノ極メテ多ク宜シク甲草ニ充ツベキモノヲ乙草ニ充テ須ラク丙木ニ用ウベキモノヲ丁木ニ用ウルガ如ク正確ニ其植物ニ中ラザルモノ僂指スルニ違アラズ此ノ如ク當ニ彼植物ノ名タルベキモノヲ採リ來リ以テ此植物ヲ呼ビテ得々タリ嗤フベキノ甚ダシキモノニアラズヤ而シテ又彼ノ漢名タル元ト是レ單ダ一支那ノ方言ノミ我日本ノ植物ハ普通宜シク我邦固有ノ名稱ヲ以テ呼ンデ可ナリ否、必ズ然カセザルベカラズ既ニ本草時代ヲ過ギシ今日尙何ヲ苦ンデ支那ノ方言ヲ以テ我邦ノ植物ヲ呼ブコトヲ爲サンヤ是ヲ以テ予ハ從來我邦ノ植物ヲ呼ブニ重キヲ漢名ニ措カズ從テ常ニ之ニ就テ漢名ナルモノヲ考ヘシコト殆ンド之レナク毎ニ假名ヲ以テ單ダ我邦名ノミヲ記セリ故ヲ以テ此ニ本書ヲ再訂スルニ當テモ亦漢名ハ唯前人ノ用キシモノヲ抹殺セザルニ止メ敢テ私見ヲ以テ之ヲ左右セシコトナシ故ニ書中依然之ヲ存スルコトアルモ是レ固ヨリ予ノ所信ノ標識ニハアラザルナリ

○書中著者能ク林氏ト記セリ是レ和蘭國「ホツツイン」氏(*F. Houttuyn*)ノ著書ニシテ固ヨリ林氏即チ「リンネ」氏(*Karl. von Linne*, 即チ *Carl. Linnaeus*)自身ノ著書ニアラズ唯「ホツツイン」氏ガ「リンネ」氏ノ學式ニ則テ以テ天物ヲ記述セルモノニシテ題シテ *Linnaeus Naturlyke Historie* ト云ヒ全部三十四卷アリ西暦一千七百六十七年(寶曆)ヨリ同一千七百八十二年(天明元年)ニ亘リテ同國「アムステルダム」府ニテ出版シタルモノナリ而シテ書中又其第一種、第二種、等ト云フハ原書中共植物ヲ列記セル順次ノ號數ナリ著者即チ飯沼慾齋翁ハ

杜若佩芬遠方望吾行  
橙紅大ふ條毛白蘭新  
蒸清遠自其一族の細花

ハナツルヌ



『草木圖說』卷ノ一ノ卷頭ニ掲ゲアル懲齋先生

自筆ノ吟咏

アル人ノ直ニ首肯スル所ナリ況ヤ當時ニ在テハ其參考ニ資スベキノ圖書固ヨリ少ナク今時ノ如ク幾多利便ノ典籍之レ無キヲヤ今日ニ在テ翁ノ定メシ名稱ヲ閱スレバ則チ其名ノ其實ニ副ハザルモノ甚ダ多シト雖ドモ當時ニ在テハ何人ト雖ドモ蓋シ之レ以上ニ出ヅルコト能ハザリシナルベク頭腦非凡ニシテ精力絶倫ナル飯沼翁獨リ

主トシテ此書ヲ用ヰ  
以テ植物ノ洋名ヲ定  
メタリ而シテ其之ヲ  
定メントスルヤ其屬  
(Genus)種(Species)  
ヲ搜索スルニ其間實  
ニ多數ノ時間ヲ費セ  
シコト今ヨリ之ヲ想  
像スルニ餘リアリ其  
僅ニ一行ニ記シ下シ  
タル只一個ノ羅名  
名(ラテ)及ビ蘭名(オラ  
ニア)ヲ抽出センガ爲  
メニハ實ニ如何ニ長  
ク著者ヲ苦シメシカ  
ハ此ノ如キ事業ニ經

能ク之ヲ爲セシノミ固ヨリ竟ニ本草式ヲ脱スルコト能ハザリシ伊藤圭介氏等ノ企及シ能ハザリシコトハ同氏等ノ著書并ニ言行ニ徵シテ今ヨリ之ヲ追想スルニ難カラズ此ノ如キハ眞ニ賭易キ事歷ニシテ印痕彰々敢テ春秋ノ筆ヲ俟タズシテ明カナリ、翁ノ齡既ニ知命ヲ過ギテ身老境ニ在リト雖ドモ奮テ能ク之ヲ遂グ其氣力ノ旺盛ナル壯者ト雖ドモ遠ク及バズ世ノ此書ヲ繙ク者翁ノ此勞ニ想到スルコト鮮ナシ故ニ特ニ之ヲ記シテ翁ノ努力セル一斑ヲ示スコト此ノ如シ

○書中又時々、鐸氏ト云フ是レ「レーベネウス」氏 (*Rembertus Dodoneus*. 即チ R. Dodoneus) ハシテ其書ハ Cruydt-Boeck ナリ西暦一千六百十八年(元和四年)和蘭國「ラヤデン」府ニ於テ出版セルモノナラ

○書中又、阿須氏ト云フ是レ「オスカム」氏 (*Didier. Leon. Oskamp*) ハシテ其書ハ Afbeeldingen der Artseny-Gewassen ト題シ四巻アリ即チ西暦一千七百九十六年(寛政八年)ヨリ同一千八百年(寛政十一年)ノ間ニ於テ和蘭國「アムステルダム」府ニテ出版セル藥用植物圖譜ナリ

○書中又、物印滿氏ト云フ是レ「ワインマン」氏 (*Joh. Guili. Weinmann*) ハシテ其書ハ Phytanthoza Iconographica ト云ヒ全部四巻ヨリ成リ西暦一千七百三十七年(元文二年)ヨリ同一千七百四十五年(延享二年)ノ間ニ獨逸國「ラゲンスブルヒ」府ニ於テ出版セル植物ノ彩色圖譜ナリ

○又、印葉圖ト云フ是レ「キニホフ」氏 (*Johann Hieronymus Kniphof*) ハ著 Botanica in originali seu Herbarium vivum etc. ハ指シタルモノニシテ西暦一千七百五十七年(寶曆七年)ヨリ同一千七百六十四年(明和元年)ノ間ニ於テ獨逸國「ハレ」府ニ於テ出版シタル書ナリ○當時我邦ノ人能ク引用書ノ原書名ヲ著ハサズシテ唯其譯名ノニヲ掲ゲ又林氏、春氏、等ト記シテ著者ノ全名ヲ擧ゲズ毎ニ後人ヲシテ其著者ノ名ト書名トヲ摸索スルニ苦シマシム弊ト謂フベシ

○書中又、西勃氏ト云フ是レ「フィル・ボルト」氏 (*Philipp Franz von Siebold*) ナリ而シテ飯沼翁ハ同氏ノ孰

ノ書ヲ用キシヤ予ハ未ダ之ヲ知ルニ及バズ

○書中又、春氏ト云フ是レ「ツンベルグ」氏 (*Carl Peter Thunberg*) ナリ其書ハ即チ同氏ノ著 *Flora Japonica* ニシテ西暦一千七百八十四年(天明四年)獨逸國「ライプチヒ」府ニ於テ出版セルモノナリ而シテ飯沼翁ハ果シテ親シク本書ヲ使用シテ細心考證セシヤ否ヤ予ハ頗ル之ヲ疑フ何トナレバ翁ノ書中通ジテ其本書ヲ使用セシ痕跡ヲ認ムルコト能ハザルト同時ニ若シ又親シク本書ヲ手ニシテ以テ彼此參照セシトセバ則チ必ズヤ幾多ノ點睛ヲ書中ニ見ザルベカラザレバナリ或ハ當時絶テ無クシテ僅カニ之レアルガ如キ本書ナリシヲ以テ偶ニ他ノ所藏ノモノヲ閱セシ乎又或ハ只伊藤圭介氏編著ノ泰西本草名疏(上述「ツンベルグ」氏ノ *Flora Japonica* 即チ日本植物志ヨリ植物ノ名稱ヲ拔萃シテ臚列セシ書)ニ據リシモノ乎予ハ今之ヲ詳ニスルコト能ハズ

○書中往々、名府トアルハ尾張ノ名古屋ヲ指シタルモノナリ

○又、雀巣庵ハ屋張名古屋ノ本草家吉田平九郎氏ノ號ナリ

○飯沼翁所藏ノ書今其之ク所ヲ知ラズ遺族ノ人ハ言フ曩ニ政府ニ獻ゼシト而カモ政府ノ圖書ニ之ヲ見ズ同好者モ亦之ヲ藏ズルナク坊間亦絶エテ之ヲ出サズ手澤ノ書今何クニカ在ル惜ムベキ哉

○本書ノ原版即チ安政三年(西暦一千八百五十六年)始メテ出版セル書ニ在テハ書中本文ノ和名ト卷頭目錄ノ和名ト相異ナルモノアリ例ヘバ卷六中ノオホ子ブ力ノ如キ書中ノ名ハオホ子ブ力ナリト雖ドモ目錄ノ名ハオホ子キナリ而シテ此ニハ其本文ノ名ヲ採リテ以テ目錄ニ關ハラズ

○書中花藥ノ解剖圖解ヲ記スルニ當テ往々第何鏡ト云フ是レ翁ノ蘭書ニ就テ其構造ヲ研究シ自ラ尾張ノ名古屋ニ造リ同地ノ工匠ヲシテ製作セシメタル顯微鏡ヲ以テ視タル所ヲ記セルナリ翁常ニ此鏡ヲ使用シテ花藥ヲ檢シ以テ其狀ヲ究メシナリ此品今尙其家ニ傳フ偉人遺愛ノ什器宜シク珍藏すべきモノナリ

○本書卷頭ニ挿メル飯沼翁ノ小照ハ翁ノ遺族ノ語ル所ニ依レバ則チ翁ノ長子(四世ノ飯沼龍夫氏)ノ同州

久世治作氏、小島五郎作氏等ト共ニ僅ニ蘭書ニ依テ其術ヲ研究シ薬品ヲ自製シ以テ撮影セシモノナリ當時寫眞ノ術尙未ダ開ケズ苦辛漸ク其技ヲ識リ得テ之ヲ試ミ以テ幸ニ翁ノ真影ヲ後世ニ傳フルヲ得テ予等今日其遺容ニ接スルヲ僥倖ス豈ニ怡バシカラズヤ而シテ翁ノ真影今其家ニ存スルモノニアリ一ハ即チ是ニシテ壯時ノ像ナリ影痕今ニ至テ尙頗ル分明ナリ一ハ即チ翁晩年ノ小照ナリ年ヲ累ネテ今其像影極メテ模糊タリ寔ニ惜ムベシ新訂版卷首ニ掲ゲタル石版畫ノ肖像ハ蓋シ想フニ當時此ニ寫眞ヲ基トシテ作リシモノ乎而カモ上々ノ作ニアラザルヲ覺ユ○予ハ想フ本邦寫眞術ノ歴史ヲ記スルノ士ハ此等諸氏ノ其術尙未開ノ當時早クモ指ヲ其技ニ染メテ濃州ノ一隅ニ成功セシ跡ニ對シテ一瞥ノ價值アルコトヲ遼視スルコトノ其業ニ忠ナラザルコトヲ

○本書第一輯第四頁オランダンドクノ條下舌人ノ語アリ予勿卒之ヲ古人或ハ世人ナラント記セリ鷗外森先生懇ニ予ニ誨ヘテ曰ク舌人ハ即チ通譯人ナリト茲ニ先生ノ懇教ヲ謹謝シ併セテ予ノ膚淺ナル臆想ヲ抹撥シ以テ我無準ヲ四方ニ謝スト云フ

○又阿須氏ノ洋書名ニ就テ爰ニ田中芳男先生ノ懇示ヲ謹謝シ又鐸氏及び印葉圖ノ洋書名並ニ吉田平九郎氏ノ號ニ就テ同ジク白井光太郎氏ノ教示ヲ多謝ス

大正元年十一月下旬

東京市小石川區原町ノ弊舍ニ記ス

## ○蓄軒獨語(其五十)

蓄軒朝比奈泰彥

○*Leptogium lichenoides* A. ZAHLBR. var. *lophaeum* A. ZAHLBR.  
HUE & Lichenes Extra-Europaei, No. 21 于テ FAURIE ハ箱館ニ於ケル採集品 (No. 242, May 1897) & Lepto-  
gium lacerum Fr. var. *lophaeum* NyL. ハ鑑定シ日本ニ於ケル最初ノ記録トシテ擧ゲテ居ル、其後誰モ此地衣